

二〇一六年、十二月。

倉沢は窓辺へ近付き、背後からすると片腕を回した。琥珀色の液体が入った透明のマグを差し出す。

「おはよう」

佐竹は返事をする代わりに右手でカップを受け取った。左腕を後ろへ伸ばし、首筋に埋められている倉沢の頬へ触れる。冷たい手。雪のように。

「どうだ？」

「よく眠れたよ」

「そうか」

振り返ろうとしない。コーヒーをひとくち飲み、サイドテーブルの上へ置こうとして落としてしまった。まだ距離感が掴めないのだ。

倉沢は床に散乱したカップの破片を手早く片付けた。キッチンから布巾を取ってきて床を拭く。佐竹はそれに背を向けたまま窓の外を見遣っていたが、しばらくして両手で目許を覆った。

「ごめん……」

「気にするな。代わりのカップなどいくらでもある」

倉沢はあえて佐竹のほうを見ないようにして手許に集中した。伊織は見られたくないのだ。それをよく判っている。

佐竹伊織は彼岸の晩、山梨から川崎へ戻る途中に事故に遭った。ファンベルトが切れたアルファロメオ・ジュリアスパイダーはガードレールのない崖下へ時速百六十キロでダイブした。警察と救急車が到着した時車は完全に炎上していて、一時間もかかって消火した頃、県道を相模原方面へ向かってふらふらと歩いている佐竹が発見された。いったいどのような状況でどうやって車から脱出したのか、額から派手に出血していたが怪我はそれほど深くなかった。片方の靴が脱げて

靴下が破れ、着衣は乱れて、白いワイシャツは血に濡れていた。自分の氏名年齢を滞りなく言うことはできた。神奈川県警の刑事であることも、倉沢の携帯番号も。しかし、事故のショックからか直前の記憶をさっぱり忘れてしまっていて、そのまま今に至る。大きな外傷はないように見えた。左目に受けた強膜裂傷以外には。

佐竹は左目を失った。眼球に受けた穿孔創から眼内組織が露出し、緊急手術を施した時にはすでに手遅れで、眼球を摘出する以外選択肢はなかった。県警本部長の津山は全国で一番腕利きの義眼技師に完全オーダーメイドの義眼を作らせた。余程近くで見ない限り気付かれないが、家にいる時は外している。佐竹はその状態を倉沢に見られたくないのだ。

「浩二」

「ん？」

「一緒に津山の料理屋を手伝うって話」

「ああ」

「しばらく無理かもしれない」

倉沢は手を止め、佐竹の細い背中を見上げた。

「生活に慣れるまで」

「待っていてくれるよ。津山さんのことだ」

「そうかな」

「もちろん」

「じゃあ、浩二は？」

倉沢は黙っていた。

「俺がこんな顔になっても、一緒にいてくれるか」

「当たり前だ」

「思い出せないんだ。何をしていたのか、どうしてあんなところにいたのか」

倉沢は立ち上がり、佐竹の背を抱いた。

「俺は何をしていたんだろう？」

退院してから繰り返し襲ってくる質問だった。

伊織は土地に遺された最後の呪禍を身体に受けることで、賢吾との永遠の別離を選択したのだ、と倉沢は悟った。賢吾から完全に呪いを取り払ってやるために。そうすることで、伊織を忘れ、二階堂修哉を追っていけるように。見鬼としての、それが最後の仕事だったのだ。

だが、伊織の時間はそこで止まっている。先へ行けない。

倉沢は佐竹の後頭部に唇を押し付けた。

「一生お前の傍にいる」

佐竹の体温が上がっていくのが判った。首筋からブルガリの芳香が漂う。

「俺が伊織の眼になる」

佐竹の身体が震えた。嗚咽を堪えているのだった。

「顔を見せてくれ」

倉沢の言葉に、佐竹は俯いたままゆっくりと振り向いた。その頬を両手で包み、大きく窪んだ左の眼窩にキスした。

「お前は俺のいちばんだ。どんな伊織でも、それは変わらない」

佐竹の両手が倉沢の背へ回った。右目から涙が溢れる。

「綺麗だ。出逢った時と同じくらい」

くぐもった泣き笑いの声が聞こえた。

「あれから何年も経つのに？」

「伊織」

「ん・・・？」

「愛してる」

「・・・俺も」

終わる。

「誰よりも、浩二をいちばん大切に思っている」  
ひとつの記憶が。

二〇一六年十二月十日、伊豆大島。

彼岸のあの日から体調を崩してしまった勝又先生にほぼ付きっきりだった俺は、先生がすっかり回復し無事退院するまで警視庁と東大病院を往復する日々を送りつつ、龍介と手紙のやりとりを続けていた。スマホが横行する現在にしてはえらく古風だが、俺たちはあえて手紙という方法を選んだ。言いたいことも訊きたいことも山のようにあったが、これまでの世で感じてきた絶望や早く龍介に逢わなければならぬといった焦りは俺の中からすっかり消え去っていた。現世、並行世界、そして前世と異なる三つの時空で、俺たちに関わった人々が、何世紀にも渡り蓄積された伽陀を祓ってくれた。それにより命を落としていった者、大切な人を失った者がいる。覚醒した俺たちには何ができるだろう？ そんなことを手紙の中で話し合った。

俺が書き送った手紙はこの三ヶ月で八十二通に及び、龍介からもらったのも同数だった。何度も読み返して暗記してしまつた手紙の束を俺は後生大事に鞆へ詰め込んだ。期待と不安と、そして少しの自信と、ありつただけの愛と共に。

逸る気持ちを抑えながら船を下りた。客船待合室の中に、ひときわ背の高い男の後ろ姿が見える。記憶から消えたことのない龍介の後ろ姿。あと十数メートル。時空を超えて、俺はようやく龍介に逢える。

手を伸ばせば触れられる距離に、あともう一步。たまらず、声をかけた。

「龍介」

細い背中が動いた。

龍介が、振り向く。

龍介が、微笑む。

龍介が今、俺を抱きしめる。